

# 外国語教育部のあゆみ

最 上 英 明 (大学教育開発センター教授)

長 井 克 己 (大学教育開発センター教授)

## 1. はじめに

香川医科大学と統合する前の旧香川大学では、1995（平成7）年4月にそれまで教養教育を担当していた一般教育部が廃止され、教養教育委員会を中心に全学的な見地から教養教育を実施する新しい体制がスタートした。その後、教養教育をより充実させるために、専任教員を配したセンターが求められるようになり、2002（平成14）年4月、大学教育開発センターが新たな組織として誕生した。当初は共通教育部と調査研究部だけで組織されていたが、2003（平成15）年10月、旧香川大学と香川医科大学が統合した際に、外国語教育部も少し遅れて発足した。外国語教育部の当初のスタッフは、旧香川大学の専任教員2名、香川医科大学の専任教員2名、旧香川大学の外国人語学教員2名（担当はそれぞれ英語と初修外国語）の計6名だった。その後、医学部の外国人語学教員もスタッフに加わり、1名増員された。2007（平成19）年度から2009（平成21）年度にかけて、専任教員と外国人語学教員の区別を廃し、外国人語学教員は現在、講師として全員が活動している。

「香川大学大学教育開発センター規定」に挙げられている外国語教育部の業務は以下の通りである（第17条）。

- (1) 外国語教育の改善等の研究・調査に関すること。
- (2) 外国語によるコミュニケーション能力育成のための教材開発及び教育方法等の改善に関すること。
- (3) 外国語自習室の運営に関すること。
- (4) 英語学習システムに関すること。
- (5) 英会話講座等の企画・実施に関すること。
- (6) 派遣留学生の語学力の支援に関すること。
- (7) その他外国語コミュニケーション能力の育成に関し必要なこと。

この中で特に重点を置いているのが外国語教育の改善に向けた取り組みであるが、これについては次章で詳述する。

2004（平成16）年度、教職員対象の語学研修（英会話研修、ドイツ語会話）が外国人語学教員により試行的に実施された。幸いにも好評を得ることができたが、現在は中断している。要望があればまた実施したいと考えている。

外国語自習室の運営についても意欲的に取り組み、2010（平成22）年度の改修では、自習用ブースを従来の2倍に拡大した。自習用教材の保管場所も改修し、利用しやすい環境の整備にも心がけている。

2008（平成20）年度には中国地区・関西地区のいくつかの大学を訪問し、外国語教育のあり方や実施体制について視察した。そして翌年度から「外国語センター」（仮称）の発足に向けての議論も進めてきた。2年近い歳月をかけて構想案をまとめることができたが、実現にはまだまだ解決すべき課題も多い。

また、外国語教育の改善のために教育に専念する特命講師（非常勤教員）の採用を要求してきたが、2011（平成23）年度より英語担当の3名が認められ、英語教育改善の一助となっている。以下、外国語教育の改善に向けた試みを、英語と初修外国語とに分けて概観することにした。

## 2. 英語教育の改善に向けた試み

全学共通科目としての英語教育の到達目標は、英語によるコミュニケーション能力の育成である。その目標を明らかにするため、共通科目英語科目の名称を2005（平成17）年より「英語コミュニケーション基礎・総合・LR・SW演習」、2011（平成23）年度より「Communicative English I / II / III / IV」と改め、カリキュラムの改善を進めてきた。その変更点は以下の通りである。

- 1) TOEIC（IP）テストの義務化と到達目標の明確化
- 2) 授業内容、教科書、成績評価方法の統一と共通シラバスの導入
- 3) 自学自習用教材（2005（平成17）年度から音読筆写課題、2011（平成23）年度から e-learning 教材）の追加による2単位化
- 3) 少人数クラス化と特命講師制度の導入
- 4) TOEIC の成績による習熟度別クラス化
- 5) スピーチ・プレゼンテーション及びライティングを重視した授業の導入

各科目の到達目標の基準として TOEIC 等の標準化されたテストを併用することにより、学生は学内での順位だけでなく、自分の語学力をどの程度伸ばせば何ができるようになるかを具体的にイメージし、その目標に応じた訓練（基礎力補強、自学姿勢作りを含む）を行うことが可能となった。TOEIC の利用については、医学部では香川医科大学時代から導入されていたが、幸町キャンパスでは2004（平成16）年度、教育学部1年次生を対象に試行的に実施した。2005（平成17）年度からは、全学部の1年次生を対象に TOEIC が実施されるようになった。

同時にシラバスを全学部で統一し、1年次生科目では全学部統一の教科書2冊を用いた授業と、全学部統一の評価基準を導入した。新カリキュラムでは文学作品の訳読や異文化理解のみを目的とした授業は行われず、香川大学卒業生の備えるべき最低限の学力が保証されることを目指した。

全学生に自学自習用課題を用意し、TOEIC 受験の義務づけと同時に、週1回の授業で2単位を取得できるようにしたことも大きな変更点である。自習課題とはいえ担当教員は教科書を2冊使用することになり、隔週の課題提出の添削や学習状況の把握も必要となって、負担が増加している。そこで1クラスの学生数を減らし開講科目数を増やすことが不可欠となった。特命講師制度の採用もその延長線上にある。

2005（平成17）年から全学統一のシラバス・教科書を用いてきたが、その限界も毎年実施している

全学生と全担当教員を対象とした事後評価アンケートによって明らかとなってきた。そこで同時に導入した TOEIC を利用し、学部ごとに上級・中級・初級にレベル分けしたクラスを開講した。設定することにより、上級者はより密度の高い授業を、初級者は基礎基本に重点を置いた授業を受けることが可能となった。

2011（平成 23）年度のカリキュラム改正では、それまで自学自習用に課していた音読と教科書の筆写に代わり、携帯電話やスマートフォンからも利用可能な e-learning を課すことになった。サーバを学外に置くことで学内での管理業務を簡素化しながら、学生も教員も容易に使えるウェブベースのシステムとなっている。

### 3. 初修外国語教育の改善に向けた試み

2006（平成 18）年度に教務委員会の下に設置された「本学における外国語教育のあり方に関する WG」での議論に基づき、2007（平成 19）年度より初修外国語に新たに韓国語が加わった。現在、香川大学の教養教育で開講されている初修外国語は、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国語の 4 つとなっている。韓国語の履修希望者が予想以上に多かったため、2008（平成 20）年度より韓国語のクラスを増設したが、それでも初修外国語が必修ではない学部の学生の受講を制限せざるを得ない状況が続いている。

また、『初修外国語のすすめ』と題するリーフレットを作成し、2009（平成 21）年度入試以降の合格者全員に配布している。初修外国語を選択する上での参考資料として役立ててもらおうと同時に、履修意欲の喚起を図っている。

教育改善に向けた試みは、それぞれの外国語の担当教員が全責任を負って進めている点で英語とは異なるが、中国語に続いてフランス語も期末試験を全クラス統一化したり、中国語では担当教員が 1 年次生用に作成した教科書を統一して使用したりするなど、改善の取り組みがなされている。

2012（平成 24）年度からは、初修外国語を担当する教員が中心となって「世界の言葉～言葉の世界」と題する講義を主題 B の「グローバル社会と異文化理解」の科目群の一環として開講し、香川大学で開講されている外国語を中心とした世界の言語について、その特徴、歴史、文化的背景などへの理解を深めてもらう試みも始めている。

現在、ドイツ語を担当する外国語教育部の専任教員を中心に、香川大学の 1 年次生向けのドイツ語教科書を作成する作業を進めており、2013（平成 25）年度の授業から文系学部の統一教科書として使用する予定である。

### 4. 今後の課題と展望

2010（平成 22）年度より大学教育開発センターでは、全学共通教育カリキュラムの再構築と新しいセンター組織を目指したプロジェクトを立ち上げた。教育目標として「(21 世紀社会の課題に立ち向かう) 豊かな学問的知識と地域的理解を合わせ持ち、汎用的スキルとともに主体的な市民としての態度を形成した人間の育成」が定められた。外国語はコミュニケーション科目の中に位置づけられ、英語教育には「コミュニケーション能力」の育成、初修外国語教育には「異文化理解力」の向上にもよ

り一層の取り組みが求められるようになった。これまで述べてきた改善に向けた試みも、その延長上でなされてきたが、今後もさらに努力していく必要がある。現在は学部主導で実施されている海外での語学研修も、全学的にバックアップする体制を整え、さらに充実させていくことが望まれる。冒頭でも触れたように、「外国語センター」（仮称）発足に向けての議論も進めてきたが、外国語教育部もさらに脱皮して、香川大学の外国語教育のさらなる充実に向けて取り組んでいきたい。